

浄土教の人間観

特に善導の人間観について

恒 川 健 夫

仏教は人間に関する諸問題を解す教である。

この人間に関する諸問題を見ていくにあたつて、先づ最初に考えなければならないのは、人間をどのように見ているかである。

所で、人間とは如何なるものかが問題点である。しかし、浄土教であるから、一般にいう

例へば人間学の如き広い範囲ではない。

では、仏教を大きく分けると、聖道門と浄土門の二門に分別することが出来る。その中聖道門の人間観を見ると、一般に悉有仏性ということから、人間の智慧と努力によつて仏と同じように悟りをひらくことが可能であるという見方をされている。所謂人間の可能態を高く評価するものである。しかし浄土門の如く一切衆生凡夫という見方ではない故に、聖道門は「宗」により色々な見方

をされていることに注意しなければならない。しかし今はそれを詳細にのべることは出来ず、法相唯識の五姓各別説から、天台の一切皆成説等にいたるまで色々な説かとかれている中の、法相と天台を見ることにする。

法相唯識の五姓各別説とは、人間の種性に菩薩定性、緣覚定性、声聞定性、三乘不定性、一闍提とがあるとして、人間は先天的にこれらの五姓の一つを具有しているというのである。要するに、無漏種子が本来具つていないかによつて区別されるのであつて、本来具つている機類は仏になることが出来るが、具つていない機類は修行の如何に関らず、仏となることが出来ないという見方である。従つて、法相宗にては、五種の人間型を区別して宿命的に成仏の可能と不可能とを分別しているものである。要するに絶対差別観に立つた見方のものである。

所で、天台の伝教大師の説を見ると、一切衆生に悉く仏性がそなわつているという説を強張したものかわからなる。それは「本質は平等であるか、個性に差別の有るのは教行証理の美である」という如く、聖人と凡夫とに

区別されているのである。

さて、問題はこの凡夫である。この凡夫につき色々研究したが、結局は「浅識愚劣」といわんが為に、聖道門の凡夫観は、分類種別的な凡夫観であつた。

ここで、浄土門に入るが、聖道門の人間観は、機根と智慧を根本としているのに対して浄土門は、非愚を根本にしたとらえ方である。

韋提希の求道も、いわば非愚に悔することから初まるのである。曇鸞にして凡夫の自覚といえるべき、人間を極悪罪人といい、天才的な把握がされている。曇鸞の下品の救済たるものは、自覚もないで言えるであろうか。その自覚された人間の存在を「我從無始循三界、為虛妄論所廻轉、一念一時所造業、足擊六道滯三塗」というのである。これを道綽が継承して、余既自居火界、冥想懷怖………来立難可界進」となり、この二つは善導の機の深心に先驅となつたのである。

善導の信ぜよといったのは、無有出離之縁の機のこと
で、即ち、罪惡深重なる機を信ぜよといわれたのである。

換言すれば、自己の救われない理由たるものは、自己の内奥にある。その内奥にあるものは、業である。その業たるものが存在しているから、人間は輪廻し、所謂無出離縁となるのである。

次に、研究したのは非愚をもつた人間の状態である。それは虚妄の状態、危機の状態、単独の状態、流転の状態の四つに区別して研究した。所謂この四つが自覚、又知らされて願生者になるところまで研究した。それは二河譬を現代的に解釈したのみである。

法然については、善導と何ら変くことなく確別に面白い、新しいものがなく一文不知と善導の機の深信の意味と同じ意味であるということを証し、他は別に面白いものがなく、結論に入ることになりました。

